

加倉井砂山と日新塾の教育

鈴木 暎一

1. 日新塾は加倉井砂山（文化2（1805）年～安政2（1855）年：享年51）が茨城郡成沢村西坪（水戸市成沢町）の自宅に開いた私塾。門人数，設備，教育科目 ― 水戸藩最大規模の私塾。北関東でも随一か。

- ・砂山 ― 諱（いみな）は、久雍のち雍，字は立卿，通称は淡路，砂山のほか西軒，頼葦（らいあん），不知老斎の号。
- ・父は久泰。砂山はその次男。
兄久継が文政3（1820）年，27歳で死去。
→ 16歳で家督を継ぐ（出府の意志を断念）
- ・加倉井家は代々同村庄屋。この地方の素封家・名望家
久泰 ― 郷土（50石）→ 西坪に家を新築 → 天保10（1839）年没（79歳）

2. 砂山 ― 天保10（1839）年 全隈村兼帯庄屋

天保12（1841）年 山横目兼務

天保14（1843）年 格歩行士列

→ 同村同族の加倉井忠珍に学ぶ

↳ 立原翠軒 → 山本北山
↳ 亀山鵬斎

- ・家督を継ぎ，郷村子弟の教育に専念。
はじめ，父の私塾（門弟20～30人）の補佐役。
→ 20歳頃から父に代わって責任をもつ立場に。

3. 門人の増加

- ・文政9（1826）年 22歳 ― 塾舎三楽楼（3間5間の2階建て）

↓
会沢正志斎「君子有三樂」揮毫

- ・天保13（1842）年 38歳
偕楽園好文亭落成 ― 斉昭，詩会開催
→ 砂山の名声も高まる。

- ・塾舎有隣館増築（4間6間の平屋造り）

行伍塾，万甫楼，日新舎も

「三楽楼，不知老斎，行伍塾，万甫楼，有隣館，日新舎，皆書斎名也」

（興野道甫の砂山墓碑銘草稿中にある文章）

4. 30 余年に及ぶ教育活動，その門人数は？

- ・「子弟三千各長苗」（102 人～60 人）

嘉永元（1848）年 44 歳 8 月 10 日 —— 72 人

8 月 11 日 —— 75 人

同 3 年 2 月 11 日 —— 60 人

？ 15 日 —— 91 人

16 日 —— 102 人

17 日 —— 70 人

6 日 —— 81 人

7 日 —— 84 人

8 日 —— 73 人

9 日 —— 70 人

- ・近郷 2 里半くらいまで —— 通学範囲

寄宿生 —— 30～40 人？

「茶話睦講」 —— 近郷の老若男女に。

5. 教育方針 —— ①個性の尊重（墓碑名参照）

②時代の進運に即応する教育

- ・「おのか唐学のみおや加倉井淡路のきみハ，歌よむわさハさらなり，五十とせはかりのをり，蘭学し玉ひ，いとまのみをりにハ，和蘭字うつし学び玉ひけるに，とみにみ病ひにてみまかり玉へるゆゑにえとけたまハすなん」（興野道甫「道志留倍」より）

道甫は文政元（1818）年生まれ，茨城郡高久村組頭加藤木信衛門の長男。21 歳の時興野助右衛門の養子となる。12 歳で入門。のち塾長。

- ・道甫，袴塚翁（山横目袴塚重右衛門か？）の紹介で入門。

「初て文選はかく大学ハかくといふことををしへられたり，いといとうれしき事になん・・・・このころハ故郷の実家殊に窮たるときにて麦米ハ勿論なへてのくひもの都てとほし，大勢の子供にていかにもくらしかねたり，孝経一卷かひもとめたくおもひけれともそをもとむる力なくてなん，孝経の価ハ百四十位なるへきにあらはれるさまなり，油もしはしはたへて寒中夜着となんいへるものをきて庭にいててふみよみたりき，加倉井先生ハもちろん袴塚翁にもとしの暮にハそれぞれ謝礼をもすへき事侍れと一文もなければ抛なくて汗なとなかしき，先生ハいととふとき人にて礼記の貧者不

以隼といへるをひき玉ひて仰られたる事ありき、そのうれしさいまに忘草のいかに忘れ侍るへき、おのれふみこのめるをめてたまひて、とまりなハこのふみをしへたまふへしと被仰き」(無題の小冊子)

6. 教育科目〈文武共習が特色〉

- ・学芸 —— 読書, 習字, 作詩, 作文, 歴史, 地理, 窮理, 兵学, 時事問題
(往来物, 「実語教」→ 四書・五経 → 「平家物語」・「太平記」, 「史記」・「資治通鑑」・記紀・「万葉集」・「古今和歌集」)
- ・武芸 —— 剣術, 砲術, 馬術, 教練
- ・その他 —— 医書多数所蔵 (茨城県立歴史館に 624 部, 1824 冊。大部分が医書。)
- ・実地訓練
十萬原 (水戸市), 徳化原 (城里町)
鉄砲の稽古 —— 月の 5 の日, 邸内に射的場あり。(屋敷配置図参照)
剣術は神道無念流
乗馬 —— 馬 3 頭飼育 (7 の日)
↓
天保 14 (1843) 年 3 月, 斉昭に扈從して出府 → 高島流砲術を修め帰る。

7. 藩内は党争が次第に激化の時勢

- ・一党一派に与することを嫌い, 党派を超越して教育に専念。
「烈公の冤罪を蒙るに, 藩士党を建てて相軋す。……藩党正と称し奸と称す, ……遂にこれを度外視す。」(「砂山先生伝」石川忠和「砂山詩纂」より)
- ・砂山自筆の書簡 (別紙参照)

8. 主友・門人たち

- ・興野道甫, 光岡多治見, 斎藤監物, 川崎八右衛門, 香川敬三, 藤田小四郎, 飯田軍蔵, 石川忠和など。
→ 様々な人勢航路, 地方の私塾の門人群像

9. 砂山の教育の影響

- ・郷村社会の生活に深く根を下ろして家業に励み, 教育に専念
→ 砂山の精神を各地に伝え広めたこと
- ・中には尊攘思想の洗礼を受けて, 政治意識に目覚め, 現状打破を叫ぶ志士に。
- ・実業家や医者としての活動を通し地域に貢献。

武芸塾

文化7(1810)「武芸上覧御用留」より
表10 武芸指南者一覧 (文化7年3月)

流儀	指南者人数	姓	名
槍術	9	原田兵助	岡本野水、酒井平衛門、猪飼伝八、深沢茂衛門、谷田部藤七郎、岡見治平、山内善左衛門、布施太郎八
長刀	7	白石十衛門	佐久間伝介、天野竜衛門、平山弥次郎、谷田部覚衛門、三宅十衛門、西野庄藏
居合	18	林十左衛門	片山太郎吉、蔭山又十郎、斎藤三郎大夫、井出弥八郎、三宅十衛門、流重兵衛、渡辺久介、佐藤権内、駒井藤次郎、駒田八十郎、谷田部藤七郎、奥山市之衛門、加治平内、河野利左衛門、谷佐之衛門、高橋与之衛門、鈴木【 】
兵法	14	内藤弥次郎	横山越殿藏、床井彦大夫、市毛谷衛門、伊藤左一衛門、鬼沢尉藏、寛庄藏、小田源太左衛門、若島藤内、宮田三郎介、岡見甚内、三木陸衛門、鶴殿平七、佐藤政之進
剣術	8	曾川源大夫	堀口庄大夫、栗田郡司、三谷政弥次(大剣)、中山半衛門、鳴海弥次衛門、白須又藏、坂内忠次衛門(両剣)
柔術	10	梅沢源太郎	坂内忠次衛門、山本新五郎、芳賀庄兵衛、武平次(町同心)、天海政五郎、国分弥惣衛門、石野源次郎、小田野与一郎、斎藤次郎(町同心)
長剣	6	内藤林之平	堀口庄大夫、河野利左衛門、岡本小兵衛、矢野長九郎、国分弥惣衛門
陣様	2	白須又藏	天野竜衛門
拳銃	3	谷登十郎	安積三郎衛門、谷左之衛門
軍用	7	富田理介	井上藤左衛門、山本新五郎、佐野孫兵衛、徳大寺左兵衛、根本新平、岡本小兵衛
射術	14	池上新衛門	渡辺太郎左衛門、太田彦衛門、太田彦八郎、横屋半大夫、佐野四郎衛門、庄五次衛門、柳原新次郎、佐々木源八、海河衛門、芦沢次郎、野倉稻母之介、佐々木重八
鉄砲	16	兼子八十衛門	岡山次郎兵衛、多賀谷勘兵衛、安松伊藏、美濃部又五郎、竹谷忠衛門、高山角馬、跡部田舎、河方内藏、尾崎権大夫、神代奎大夫、駒井藤次郎、佐藤権内、白石丹次衛門、横屋半大夫、松平源藏
馬術	11	大田原伝内	河方善兵衛、源谷竜左衛門、小川善衛門、岡寛治太衛門、江幡市左衛門、堀口幸介、岡見弥七、堺野伝三郎、後藤政衛門、加藤丹次
諸礼	5	加藤伝之衛門	石川治左衛門、岡見甚内、益子小作、新井宗左衛門
火術	5	堀和角之介	堀本新平、梅沢源太郎、本郷金衛門、徳大寺左兵衛
水術	4	宮本源藏	松村伝七郎、市川吉【 】、太田【 】
騎術	1	榎本四郎兵衛	
居物	1	遠山忠三郎	
三鳥流	1	前田介十郎	

註【 】は欠損のため不明の部分(欠損している他の部分の記載で判明した者は書き入れてある)。

学問・手習い塾

文化6(1809)「武芸上覧御用留」より
表11 手習読書指南と門人数

指南	姓名	手習読書人数	子供人数	備考
立算	原翠軒	5	6	内2人話切
算	右平	20		
飯島	惣兵衛	8	9	
小田倉	十大夫	9		
萩谷	利三郎	14	15	
菊地	治衛門	5	6	
篠本	玄昌	20		
秋山	八兵衛妻	10		女子ばかり
(石川)	久次衛門	20		
(堀)	清衛門	26		
(同)	長次郎	8	9	
安松	七郎兵衛	5	6	
宇佐美	久五郎	5	6	
都築	惣八郎	5	6	
秋山	豊之助	68		
飯村	富吉	30		
久保田	栄助	22	23	
西野	庄藏	22	23	
菊地	小八郎	2	3	
堀口	庄大夫	10		
河野	利左衛門	5	6	
梅沢	孫太郎	5	6	
梶間	隆啓	9		
池永	玄宅	15		
五百城	軍藏	5	6	
神長	忠五郎	6		
瀬尾	弥一衛門	3	4	
		3		勘定所手代

小山弥惣衛門	40	人程	元金方手代
金沢半之助	15	△	都合55人程
金沢伊兵衛	10	○	普請方手代
大森左吉	12~13	○	失倉方手代
清水新十郎	5~6	○	山田吉郎組先手同心
清水新十郎	10		肴方手代
広瀬伝五衛門	8	△	町方内物書
菊地庄兵衛	40		郡方手代
北条金衛門	50		高山勘左衛門支配同心
宮部東元	30		本三町目
三経	7~8	△	本四町目駿河屋弥兵衛
			隠居
			都合37~38人程
大竹玄春	30		都合48人程
長衛門	17~18	△	本五町目
竹下八左衛門	5	△	曲尺手町ふじや
小川惣兵衛	11		都合11人程
加倉井江水	20		宮下住居
清水順藏	4	○	元郡方手代
坪左門	32		浪人
	10	○	白銀町
			吉田大富司支配内匠倅

註 △は歳子、□は孝問のみ、○は手習のみ、◎は読書のみ

出典:鈴木暎一1987『水戸藩学問・教育史の研究』吉川弘文館

より転載

※文化6(1809)「武芸上覧御用留」は茨城県立歴史館所蔵



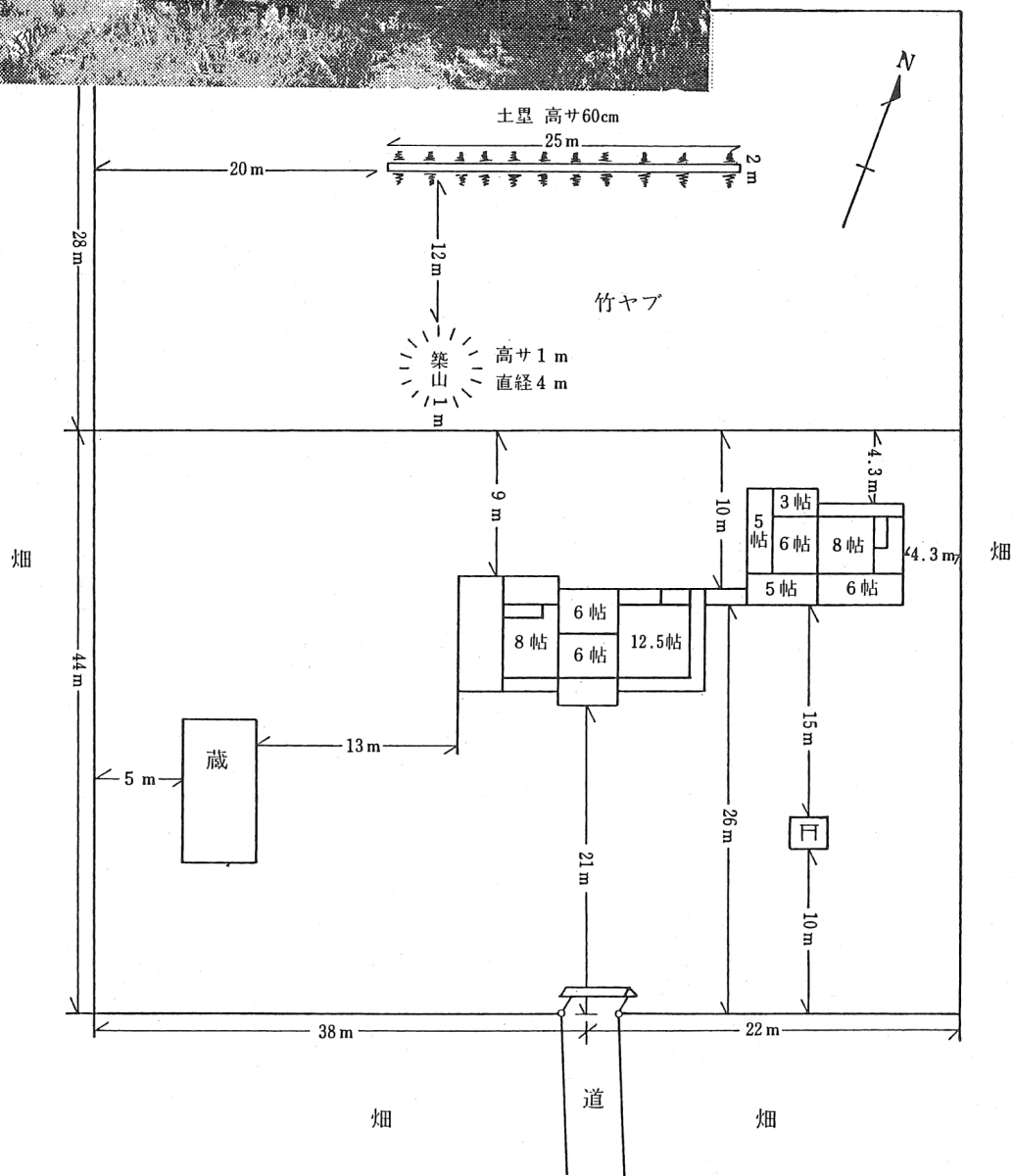
「青門肖像」(一部) 水戸市立博物館寄託 (水戸市立図書館所蔵)

鈴木暎一氏講演資料②

第16図 加倉井砂山宅（正面）



第17図 加倉井砂山宅配置図（現況）



『水戸市史中巻（三）』より転載

鈴木暎一氏講演資料③

